『古代アメリカ』16, 2013, pp.59–71

＜調査研究速報＞

チャルチュアパ遺跡における後古典期前期文化
—土器と建造物の分析成果から—

吉留正樹
（鹿児島市教育委員会）

はじめに

本論はエルサルバドル共和国チャルチュアパ遺跡の後古典期前期に属する土器と建造物の分析を軸として、後古典期前期文化の形成過程について再検討するものである。チャルチュアパ遺跡の後古典期前期文化はメキシコ中央高原からの新しい言語集団の移住によって劇的な変化がもたらされたと考えられていたが［Fowler 1989; 大井2000］、そうした変化はチャルチュアパ遺跡における在地集団の文化要素の選択的受容による結果であった可能性を指摘する。

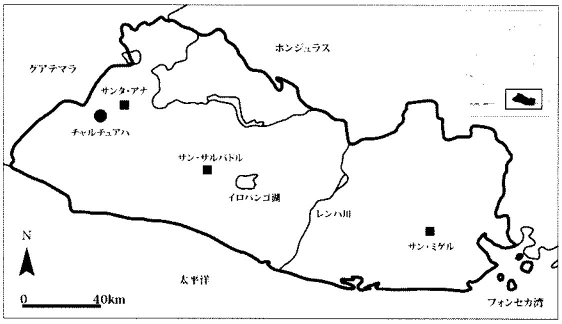

図１　チャルチュアパ遺跡位置図

1. チャルチュアパ遺跡

チャルチュアパ遺跡はエルサルバドル共和国サンタ・アナ県チャルチュアパ市に所在し、先古典期前期から後古典期にかけて約2500年以上にわたり継続的に人々の活動の痕跡が確認できる遺跡である（図1)。カサ・ブランカ地区、タスマル地区、エル・トラピチェ地区といった11の地区で先スペイン期の活動の痕跡が確認されている（図2)。

地理的にはエルサルバドル共和国の首都サン・サルバドル市から西へ約80kmに位置し、グアテマラとの国境付近の海抜1400m級のアパネカ山系からなだらかにのびた標高約700mの高地に位置しており、一年を通して気候は温暖である。

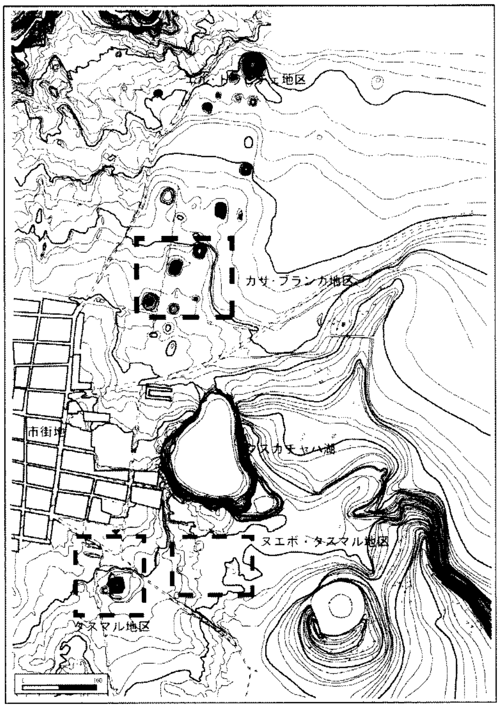

図２　チャルチュアパ遺跡
(Sharer 1978: 付属地図・一部改変)

チャルチュアパ遺跡において後古典期前期と考えられる活動の痕跡で代表的なものはタスマル地区にみられる。タスマル地区のピラミッド形建造物基壇であるB1-2建造物が機能し、最終段階である第5築造段階の埋葬2から出土した炭化物のC^{14}年代測定結果では、紀元後770-1000年の年代値が得られている［Kato 2006］。さらにチャルチュアパ遺跡の広い範囲で活動の痕跡が確認され、タスマル地区の北東約200mに位置するヌエボ・タスマル地区では同時期の住居祉と想定されるものを含む18基の建造物がみつかり、ロス・ガビラーネス地区などでも建造物が確認されている［Erquicia Cruz 2005; Shibata 2005a, 2005b］。

2．研究史と問題の所在

チャルチュアパ遺跡ではメキシコ中央高原の影響を受け、文化要素に変化がみられることを画期として後古典期前期とみなされている。これは、シペ・トテック神像［Boggs 1945］、トルテカ文化の中心として知られるメキシコ中央高原のトゥーラ遺跡に特徴的な壁面装飾突出石がタスマル地区B1-2建造物にみられること［Kato 2006; Valdivieso 2007］、平面プランがＩ字形を呈する球技場がみられること［Ito y Shibata 2007］、そして、メキシコ西部を起源とし、メキシコ中央高原を経由して伝播したと想定される土製パイプ、銅製鈴、黒曜石の磨研技術が出現すること［大井 2000］などを根拠としている（図3）。この文化要素の変化の要因として大きく「移動説」と「交易説」の2つの仮説が想定されている。

「移動説」はメキシコ中央高原に端を発する言語集団の移動がメキシコ湾岸、ソコヌスコ地域を経由してエルサルバドル、ニカラグアなどに至ったとすることを根拠とし［Fowler 1989; 大井2000］、一方の「交易説」は交易を通じて文化要素が伝播し、メキシコからの文化要素が出現したと想定するものである［Amaroli 1989; Sharer 1978］。例えば、R・シャーラーは後古典期前期として設定したマトツィン期の土器群のうち赤色塗彩土器群について先古典期からの在地土器の伝統に属するものと想定した［Sharer 1978: 128］。移動説寄りの大井邦明はカサ・ブランカ地区の発掘調査により得られた資料から、後古典期前期に属する土器群を、メキシコ中央高原にみられる「マサパ系土器」の特徴を有するものと推測した［大井 2000: 425］。

つまり、チャルチュアパ遺跡における後古典期前期文化研究の論点は、画期とされる文化要素の変化が外部集団の移住により生じたのか、あるいは在地集団が交易などを通じて外部の影響を受容した結果なのか、ということに集約される。このような研究動向の中で、近年、後古典期前期に属する考古資料が増加しており［e.g. Amador Berdugo 2005; Erquicia Cruz 2005; Shibata 2005a, 2005b］、以上の論点を再考するための資料が得られている。

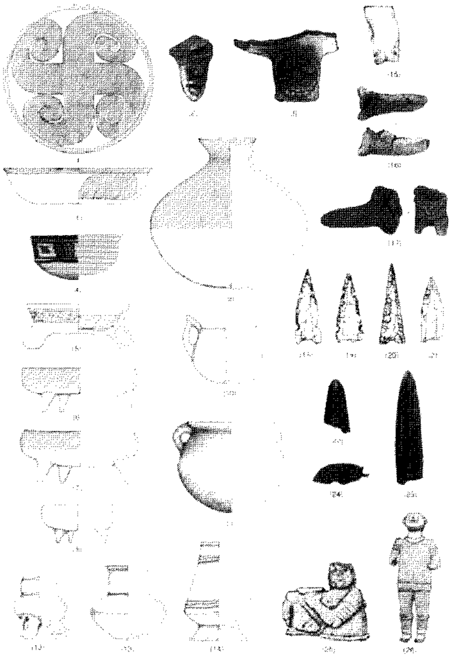

図３　チャルチュアパ遺跡の後古典期文化要素(大井 2000: 図Ⅲ-2-1)

3. 研究の目的と方法

本研究の目的は、土器と建造物の分析を軸にして、チャルチュアパ遺跡における後古典期前期文化の形成過程について再検討を行うことである。

チャルチュアパ遺跡では、土器は最も出土する遺物の一つである。さらに、その材質、形状、装飾といった特徴的な属性によって定義することができ、他の遺物と比較して型式変化を追求しやすい遺物である。つまり、型式の連続性や、外部からの影響がどのような形で現れているかを検討することに適した遺物であるといえる。

一方、本論で扱うチャルチュアパ遺跡の建造物は、宗教建築でありかつ政治的機能も有していたと考えられるピラミッド形建造物に代表されるように、集団の意識を反映する象徴的な遺構と想定できるものである。したがって、築造技術や装飾、形状などの建築要素の分析に基づいて、土器よりも象徴的な文化要素の変化を追及することが可能であると考える。

4. 土器の分析

本研究で分析対象とする土器はヌエボ・タスマル地区、タスマル地区、カサ・ブランカ地区から出土したものである。分析対象とする土器は赤色塗彩土器群、プランベート土器、ニコヤ多彩色土器である。赤色塗彩土器群は在地土器系統に属すると考える立場［Sharer 1978］と、メキシコ中央高原にみられる「マサパ系土器」の特徴を有する土器、つまり外来系の土器と考える立場があり［大井 2000］、その位置づけが未だに不明瞭な土器であり、再検討を要する。プランベート土器はグアテマラ太平洋岸、ニコヤ多彩色土器はニカラグア太平洋岸南部やコスタリカのニコヤ半島から搬入されたと考えられる土器であり、外来系の土器である。これら外来系の特徴を有する土器の分析を行うことにより、後古典期前期のチャルチュアパ遺跡においてどのような背景の下に土器製作が展開されたのか考えてみたい。

4-1. 赤色塗彩土器群（図 4）

赤色塗彩土器群はタスマル地区、ヌエボ・タスマル地区、カサ・ブランカ地区から出土している。赤鉄鉱を含む赤色顔料で装飾されていることが最大の特徴として挙げられる。以下3つの器形が確認できる。

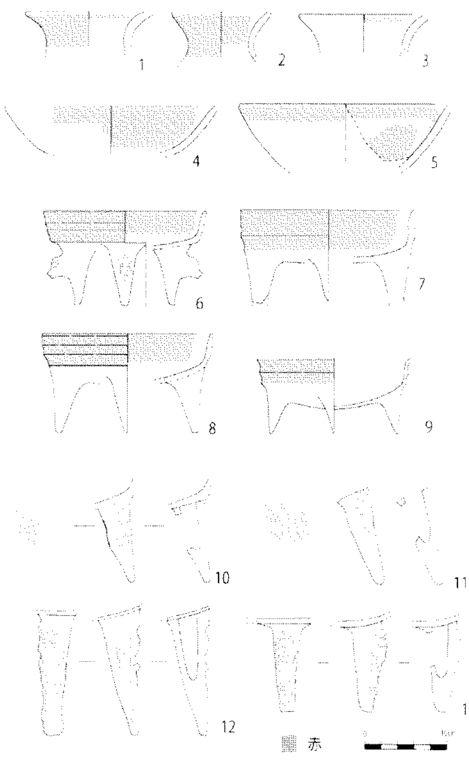

図 4　赤色塗彩土器群

壺形土器

口縁部内外面を中心に赤鉄鉱を含む顔料によって彩色されている。外面は口縁部下位まで施すものがある（図4:1, 2）。胎土は黄褐色であり、含有物として白色砂粒、赤色砂粒、黒色砂粒を含む。器面調整はナデ、もしくはミガキを施している。光沢がでるほどに丁寧にミガキ調整されているものもある（図4: 3）。いわゆるシャーラー編年でいうメタヤテ・ヘマタイト・レッド・タイプに属する［Sharer 1978］。

カサ・ブランカ地区2号建造物北側の集石遺構から出土した壺形土器の内部から検出された炭化物によるC14年代測定において紀元後960±30年という年代値が得られており、少なくとも後古典期前期初頭に位置づけることが可能である［大井 2000］。

椀形土器

口縁部内外面に赤鉄鉱を含む赤色顔料によって彩色されている。外面に口縁部から胴部に向かっ

て幅広の帯状に彩色を施すもの（図4: 4）、内面の胴部に大きな円状の赤彩を施すもの（図4: 5）が確認されている。これまでにヌエボ・タスマル地区とカサ・ブランカ地区で確認されている。

三脚付椀形土器

口縁部が直立するもの（図4: 6-8）、短く強く外反するもの（図4: 9）の2種がある。外面の器壁の断面が波状を呈する。器壁内外面に赤鉄鉱を含んだ顔料が施されている。胎土は主に黄褐色で、少量ではあるが、褐色を呈するものがある。含有物として黒色砂粒、白色砂粒、赤色砂粒を含む。底部内面は丁寧にミガキが施されているが、胴部に関してはナデのみのものもみられる。底部は若干の丸みを帯びており、三脚の円錐形の脚部を有する。脚部には、動物の頭を象った粘土塊を貼り付けたもの（図4: 6）、装飾の見られないもの（図4: 7-9）、沈線で人の顔を象っているような表現をするもの（図4: 10,11）、人物を象った粘土塊を貼り付けたもの（図4: 12, 13）といったように多彩な装飾を施す。いわゆるシャーラー編年のコサトル・ヘマタイト・レッド・タイプに属する［Sharer 1978］。

写真１　埋葬1-42 出土土器

脚部の形状は異なるが、類似する土器が、タスマル地区B1-1e建造物埋葬1-42に伴って出土している。土器は2点出土しているが、そのうち1点の土器は長方形の板状の脚部を有する赤色塗彩三脚付椀形土器である（写真1）。先に説明した典型例の赤色塗彩三脚付椀形土器は円錐形の脚部を有しており型式的差異が指摘できる。

B1-1e建造物は平石を主体として築造されている建造物であり、紀元後8～10世紀頃に建造されたと推定されている［柴田 2007: 57］。後古典期前期に属するB1-2建造物は、B1-1e建造物に続くとされる大基壇の階段を破壊してつくられており、B1-1e建造物は少なくともB1-2建造物よりも前段階に位置づけることができる。さらに、B1-2建造物第5築造段階出土土器群とヌエボ・タスマル地区出土土器群が類似していることからB1-2建造物第5築造段階とヌエボ・タスマル地区の建造物群は同時期に築造された可能性がある。また、B1-1e建造物、B1-2建造物とヌエボ・タスマル地区の建造物群の想定される新旧関係と赤色塗彩三脚付椀形土器の出土状況を考慮すると、板状の脚部を有するものと円錐形の脚部を有するものには時期差がある可能性がある（図5）。

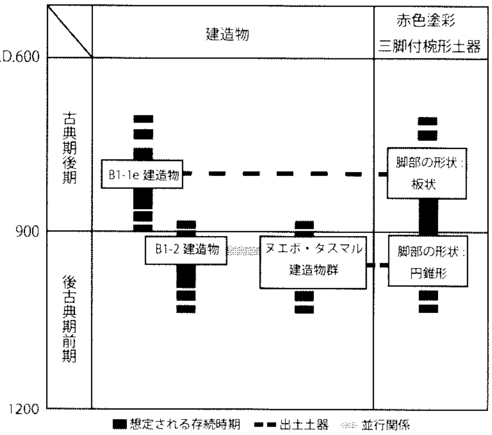

図５　建造物・赤色塗彩三脚付椀形土器の通時的変遷模式図

しかし、脚部の形状以外の特徴である、器壁の断面が波状を呈し、赤色塗彩を施すといった共通する特徴を相互に有することから時期差がある可能性は考えられるが同じ土器系統に属すると想定される。

以上から、赤色塗彩三脚付椀形土器は少なくとも古典期後期/終末期から続くチャルチュアパの在地の土器伝統に属する可能性が高いと想定される。

4-2. プランベート土器

プランベート土器はガラス質の器面を有する土器群の総称である。サン・フアン・タイプとトヒール・タイプに分類され、前者は古典期後期にメソアメリカ南海岸地域を中心として、後者は後古典期前期に属しメキシコ北部からパナマまで広範に分布する［Fahmel Beyer 1988］。胎土の精粗の差と色調、器面の光沢に注目すると、①典型的プランベート土器［e.g. Fahmel Beyer 1988; Shepard 1948］、②偽プランベート土器［Bruhns 1980; Zenil 1955］、③プランベート模倣土器の3つに分類することが可能である。

典型的プランベート土器

典型的プランベート土器は、タスマル地区、カサ・ブランカ地区、ヌエボ・タスマル地区で出土している。

壺形（図6: 1-3）、ミニチュア（図6: 4）、椀形（図6: 5）が確認されている。胎土はほとんどのものが灰色、もしくは淡いオレンジ色を呈し、精製である。最大の特徴であるガラス質の土器表面を持つ。装飾は沈線による幾何学文を主とするが（図6: 4, 5）、動物象形を施しているもの（図6: 6）も確認された。装飾技法からトヒール・タイプに属するものである。

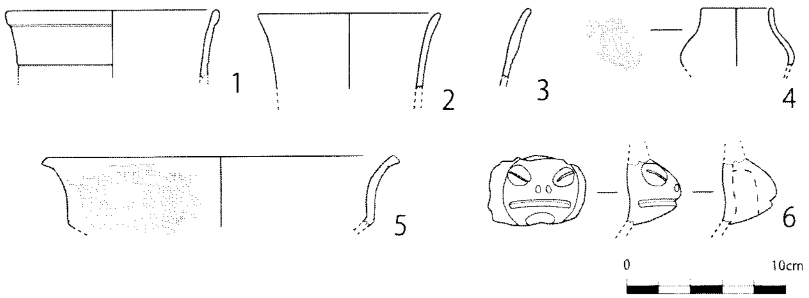

図6　典型的プランベート土器

偽プランベート土器

偽プランベート土器はヌエボ・タスマル地区で出土している。胎土が精製で、器面が灰色または淡いオレンジ色の色調をもち、ガラス質の光沢がみられる典型的プランベート土器（写真2: 1）以外に、以下のように一見すると典型的プランベート土器にみえる偽プランベート土器も出土してい

る。ひとつは、白色の胎土で精製されており、器面はガラス質の光沢を持つもの（写真2: 2）で、各地で報告されている偽プランベート土器［Bruhns 1980; Zenil 1955］に該当する。さらに、本研究で得られた資料中から、褐色の胎土に粗い砂粒を含み、器面にガラス質の光沢を有する例が確認された。

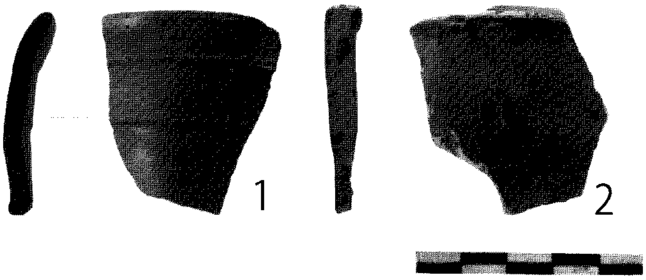

写真２　典型的プランベート土器(1)と偽プランベート土器(2)

プランベート模倣土器

プランベート模倣土器はヌエボ・タスマル地区で出土している。胎土が粗製で粗い砂粒を含み、土器表面の色調が灰色または一部オレンジ色を呈し、典型的プランベート土器、偽プランベート土器に確認された器面のガラス質の光沢をもたないものである。得られた資料は、板状もしくは円錐形の形状を呈した脚部であり、沈線で人物の顔を象形するものが確認された（写真3: 1, 2）。この装飾はコサトル・ヘマタイト・レッド・タイプの脚部（写真3: 3）と類似する。つまり、装飾としては赤色塗彩土器群の特徴を有するにもかかわらず、典型的プランベート土器に代表されるような土器表面の色調が灰色または一部オレンジ色を呈することから、典型的プランベート土器の焼成技術を模倣しようとする意図がうかがえる。

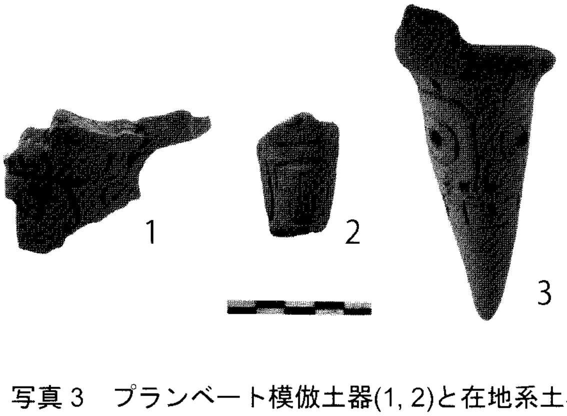

写真３　プランベート模倣土器(1, 2)と在地系土器(3)

4-3. ニコヤ多彩色土器

ニコヤ多彩色土器はニカラグア南部からコスタリカのニコヤ半島に多く見られる土器であり、クリーム色の化粧土を施し、赤、黒、オレンジにより彩色が施されるものであり、ヌエボ・タスマル地区で出土している（図7）。確認されたものの器形は全て椀形であり、胴部半ばで強く屈曲し、口縁部まで緩やかに外反する。クリーム色の化粧土を有する。化粧土の上に幅広の赤、黒、オレンジの直線により施文がなされている。口縁部内面に2状の幅広の赤線を水平に施し、外面には口縁に1状の水平赤線、胴部屈曲部に1状の水平の赤線を施し、文様施文帯として区画している。その中に赤、オレンジ、黒の線を垂直・水平方向に施して文様としている。胎土はオレンジ色で精製である。また、全面にミガキが施されている。胴部で強く屈曲し、口縁部まで緩やかに外反する椀形を呈する器形はエルサルバドルやホンジュランスの古典期後期のコパドール土器にみられる典型的な器形であり、他地域でこのような器形のニコヤ多彩色土器はみられない。

図7　ニコヤ多彩色土器

4-4. 小結

以上の土器分析において重要な点は、従来、外来系と考えられてきた土器にも在地の特徴が観察できるという点である。赤色塗彩土器群は、古典期後期/終末期に位置づけられるタスマル地区B1-1e建造物と後古典期前期に位置づけられるB1-2建造物、ヌエボ・タスマル地区、カサ・ブランカ地区から出土しており、特に三脚付椀形土器は脚部の形状に変化がみられるものの、基本的属性は相互に型式的連続性を有している。したがって、後古典期前期の赤色塗彩土器群は古典期後期/終末期から続く土器製作技術に基づき生産されたものと考えることができる。また、搬入品と考えられる典型的プランベート土器は確かにみられるものの、偽プランベート土器といったような在地で生産された可能性のある土器も確認できた。さらに、焼成技術を在地系土器に応用しようとした可能性を有するプランベート模倣土器もみられる。もう一つの外来系と考えられるニコヤ多彩色土器についてもチャルチュアパ遺跡やその周辺で特徴的な器形が確認できた。

こうした分析結果から、後古典期前期のチャルチュアパ社会が単に搬入品を受容するだけではなく、在地の土器製作技術を保持しながら外部の文化要素を取り込んでいった可能性が考えられる。

5. 建造物の分析

後古典期前期の建造物は、タスマル地区、ヌエボ・タスマル地区などで確認することができる。上部構造はほぼすべての建造物において失われていたため、建造物基壇を中心に原材料、築造技術、建造物形態、平面プランについて概観し、後古典期前期建造物の特徴を抽出する。

5-1. ピラミッド形建造物基壇

ピラミッド形建造物基壇はタスマル地区B1-2建造物にしかみられない。

タスマル地区B1-2ピラミッド形建造物では5期の築造段階が確認されている（図8）。第1～4築造段階までは土、礫を充填し、加工されていない火山性の礫を積み上げて壁面を造り、テラス部分は平石を用いて平坦に整えられている。建造物表面の仕上げとして、泥漆喰を施さない点が特徴的である。ただし、床面を泥漆喰に赤色軽石細粒を混ぜて形成したことが確認されている［Kato 2006; 柴田 2007］。

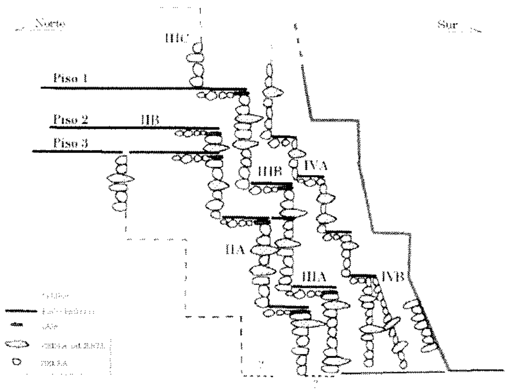

図8　B1-2 建造物断面模式図
(Kato 2006: Fig.68)

B1-2建造物における建築要素の最大の特徴として、建造物基壇部にみられる壁面装飾突出石が挙げられる。この建築要素はメキシコ中央高原に所在するトゥーラ遺跡の建造物と非常に強い類似性が指摘される［Valdivieso 2007］。この建築装飾があることによって、壁面を泥漆喰で仕上げなかった可能性も考えられる。

第5築造段階においては壁面装飾突出石を用いなくなった点、泥漆喰、軽石を仕上げとして用いる点で前段階までの築造段階と異なる築造技術が用いられているといえる。

その他、階段の両端に平坦な斜面としてつくられた手摺状の袖部であるアルファルダを有する階段部、上部構造として円柱を持った部屋構造を有することが特徴として挙げられる。上部構造の部屋状構造物に関しては痕跡のみが検出され、どのような原材料をもってどのように築造していたのかは不明である。

5-2. 球戯場

タスマル遺跡B1-3・4建造物は削平を受けているが近年の発掘調査により平面プランがI字形を呈することが判明した［Ito y Shibata 2007］。土、礫を充填した後に火山性の加工されていない礫を積み上げて壁面を形成し、床、壁面は泥漆喰に赤色軽石細粒を混ぜて仕上げている。

5-3. 多様な平面プランを有する低基壇

ヌエボ・タスマル地区の建造物群が該当し、18基の低基壇が確認されている。

円形、L字形、多角形、楕円形、方形といった様々な平面プランが確認されている［Shibata 2005a, 2005b］。原材料としては火山性の礫が用いられ、積み上げられて壁面が形成されている。L字型の低基壇であったとされる2号建造物基壇では床面が泥漆喰に赤色軽石細粒を混ぜて形成していたことが確認された［柴田 2007］。

5-4. 小結

チャルチュアパ遺跡の後古典期前期の建造物は火山性の礫を用いて築造されている。これらの建

造物は仕上げとして、もしくは床面を形成するために赤色軽石細粒を混ぜた泥漆喰を使用する共通の築造技術がみられる。一方で、メキシコからの影響とされる建築要素である壁面装飾突出石や平面プランがI字形を呈する球戯場も確認された。しかし、メキシコ中央高原のトゥーラ遺跡では壁面装飾突出石が球戯場に施されるのに対し、タスマル地区球戯場ではみられない。このように外部からの建築要素が部分的にみられることが指摘できる。

6. チャルチュアパ遺跡における後古典期前期文化

以上の土器と建造物の分析結果から考えられるチャルチュアパ遺跡の後古典期前期の文化要素の変化は、プランベート土器やニコヤ多彩色土器、壁面装飾突出石といった外部由来の要素が出現するものの、それらは在地集団によって選択的に受容された結果出現したと推測される。

赤色塗彩土器群は、古典期後期/終末期から後古典期前期への連続性が確認できることから在地の土器伝統に属すると考えられる。とはいえ、赤色塗彩土器群のなかには、少数ではあるが典型的プランベート土器の色調を模倣しようとして生産されたと思われる土器があり、外部の影響も看過することはできない。重要な点は、外部由来の焼成技術でつくられたとはいえ、脚部に沈線で装飾を施すという赤色塗彩三脚付椀形土器の典型的特徴を有していることであり、あくまでも在地系土器の型式的特徴を基本としていたという点である。

搬入土器と考えられているプランベート土器、ニコヤ多彩色土器にも同様な特徴がうかがえる。典型的プランベート土器に関していえば、少数ながら搬入品と考えられるものが存在する。しかし、典型的プランベート土器とは胎土の異なる偽プランベート土器、在地土器との折衷系と考えられるプランベート模倣土器の存在を確認することができた。つまり、後古典期前期のメソアメリカで広域に分布した奢侈品である典型的プランベート土器に対する在地土器製作集団の模倣という意識が読み取れる。ニコヤ多彩色土器についても、彩色の概念は類似しているものの、チャルチュアパ遺跡とその周辺で特有の器形を用いて生産されていることからも、他地域で生産されたニコヤ多彩色土器の装飾技法を適用あるいは模倣をして製作された可能性が考えられる。

以上から後古典期前期の土器製作者集団は在地土器の伝統を継承しながらも、外部の土器の製作技術を選択的に取り入れていたことが想定される。こうした解釈は在地土器の伝統が続くとするシャーラーの説を追認するものであるが［Sharer 1978］、外部の土器製作技術を積極的に取り入れていたことも同時に明らかになり、後古典期前期の土器群の成立はより複雑な様相を呈していたことが本研究から新しく想定されるのである。

同様の現象は建造物においてもみられる。チャルチュアパ遺跡における後古典期前期の建造物群は、基壇部の壁面を火山性の礫を用いて築造し、泥漆喰に赤色塗彩を施す築造技術が一般的である。一方で、メキシコ中央高原由来と考えられている壁面装飾突出石を用いたB1-2建造物、I字形の平面プランをもつ球戯場も確認されている。ただし、トゥーラ遺跡の場合、壁面装飾突出石は球戯場にも用いられているが、チャルチュアパ遺跡タスマル地区球戯場では確認されてない。つまり、在地の築造技術を基礎としながら、一部の建築要素だけを選択的に受容したものと推察される。

大井やフォーラーは、チャルチュアパ遺跡では異なる言語集団の移動の結果、前代とは異なる後古典期前期文化が成立したと指摘しているが［Fowler 1989; 大井 2000］、本研究で得られた成果を

参照するならば「移動説」は支持しがたい。むしろ、チャルチュアパの後古典期前期文化は、在地集団が伝統的な文化要素を保持しつつも、地域間交流などを通じて外部の文化要素を選択的に受容した結果として成立したと考えられるだろう。

おわりに

本論ではチャルチュアパ遺跡で出土した土器と建造物を対象として後古典期前期文化の形成過程について検討してきた。資料が増加しているとはいえ、依然として遺構に伴う出土状況の良好な資料は少なく、また外来系土器の胎土分析なども実施していないなど、本研究には残された課題も多い。最大の課題として文化要素の変容過程に対するより具体的な仮説の提示が求められる。本論では文化要素の変化をテーマとしながら、土器と建造物という限定的な遺物、遺構しか対象とすることができなかった。石器や土製品の製作技術の変遷、人骨の化学分析などに基づくより多角的な研究成果を統合して後古典期前期の文化要素の変化を検討し、在地集団がどのような背景の下で文化要素の選択的受容を行ったのか、その過程を明らかにする必要がある。

【謝辞】
本論は2013年1月に名古屋大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部を修正したものである。執筆に際しては、山本直人教授（名古屋大学)、梶原義実准教授（名古屋大学）には多大なるご指導、ご助言をいただいた。また、伊藤伸幸助教（名古屋大学)、柴田潮音氏（エルサルバドル文化庁文化遺産局考古課)には研究だけではなく、現地での生活に至るまで多くのご教授をいただいた。また、南博史教授（京都外国語大学）をはじめとする京都メソアメリカ考古学研究会の諸氏、市川彰氏（国立民族学博物館外来研究員）には進捗状況を通じて、多様なご意見、ご指摘をいただいた。末筆ではあるが、記して深謝の意を表したい。

参考文献

Amador Berdugo, Fabio Esteban

2005 Vergeles del Edén, Rescate arqueológico en Chalchuapa, Departamento de Santa Ana, El Salvador. *En Chalchuapa, fuentes arqueológicos, Selección de informes realizados entre 1996 - 2005*, editado por CONCULTURA, pp.19-66. CONCULTURA, El Salvador.

Amaroli, Paul

1989 *The Earliest Pipil : New Perspective on "Toltec" Presence in Southern Mesoamerica.* FUNDAR, El Salvador.

Boggs, Stanley H.

1945 Comentarios sobre una estatua de barro hallada en la zona arqueológica de Chalchuapa. *Tzunpame Año V No.IV*: 26-32.

Bruhns, Karen Olsen

1980 Plumbate Origins Revisited. *American Antiquity* 45 (4): 845-848.

Erquicia Cruz, José Heriberto

2005 Los Gavilanes, Un sitio posclásico temprano en la zona arqueológica de Chalchuapa. En *Chalchuapa, fuentes arqueológico, Selección de informes realizados entre 1996 - 2005*, editado por CONCULTURA, pp.234-247, CONCULTURA, El Salvador.

Fahmel Beyer, Bernd

1988 *Mesoamérica Tolteca sus cerámicas de comercio principales.* Universidad Autonoma de México, Mexico.

Fowler, Wiliam Jr.

1989 *The Cultural Evolution for Ancient Nahua Civilization, The Pipil Nicarao of Central America.* University of Oklahoma, Oklahoma.

Ito, Nobuyuki y Shibata Shione

2007 Las investigaciones arqueológicas en Tazumal, Chalchuapa, 2006-2007. En *XXI Simposio de Investigación Arqueológica en Guatemala,* editado por J.P. Laporte, B. Arroyo, H. Escobedo y H. Mejía, pp.458-474. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.

Kato, Shinya

2006 *Informe Final "Proyecto investigación arqueológica y restauración de la Estructura B1-2 del Parque Arqueológico Tazumal" 2004-2005. Chalchuapa, El Salvador.* CONCULTURA, El Salvador.

大井邦明

2000 『チャルチュアパ―エルサルバドル総合学術調査報告書―』京都外国語大学，京都.

Sharer, Robert J.

1978 *The Prehistory of Chalchuapa, El Salvador vol.III.* University of Pennsylvania, Philadelphia.

Shibata, Shione

2005a Nuevo Tazumal. Rescate arqueológico en un sitio contiguo a Tazumal. *En Chalchuapa, fuentes arqueológicas, Selección de informes realizados entre 1996 - 2005*, editado por CONCULTURA, pp.151-170. CONCULTURA, El Salvador.

2005b Rescate arqueológico en la lotificación ciudad Nuevo Tazumal, El Salvador. En *XVIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2004*, editado por Juan Pedro Laporte, Bárbara Arroyo y Héctor E. Mejía, pp.565-572. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.

柴田潮音

2007 「チャルチュアパ遺跡における先スペイン時代都市建造物群の構造と変遷」『メソアメリカにおける古代都市の発展に関する研究』伊藤伸幸編，pp.45-99. 名古屋大学大学院文学研究科，名古屋.

Shepard, Anna O.

1948 *Plumbate - A Mesoamerican Trade Ware.* Carnegie Institute of Washington, Washington D.C.

Valdivieso, Fabricio

2007 *Tazumal y la Estructura B1-2, regisrtro de una deconstrucción arqueológica y nuevos aportes para su interpretación.* Fundación Clic, El Salvador.

Zenil, Alfonso Medellín
1955 *Exploraciones en la Isla de Sacrificios.* Gobierno del Estado de Veracruz Dirección general de Educación Departamento de Antropología, Jalapa, México.

原稿受領日　2013年９月25日
原稿採択決定日　2013年10月14日